

大鏡『雲林院の菩提講』確認テスト 解答・解説

■ 解答・解説

問1 (1) ダ行下二段活用動詞「まうづ（詣づ）」の連用形で、謙讓語。「行く・参詣する」の謙讓で、参詣する仏（菩提講）への敬意を表す。(2) 語り手（作者＝「私」）の動作。／解説：「まうづ」は「参上する・参詣する」という謙讓の動詞。直後の「侍り」と合わせ、語り手が読者にへりくだって語っている。

問2 丁寧の補助動詞（「～です・～ます」にあたり、聞き手＝読者への敬意を表す）。／解説：動詞の連用形＋「て」に付く「侍り」は丁寧の補助動詞。語り手が聞き手にていねいに述べている。

問3 (1) こよなし（ク活用形容詞）。(2) この上ない・格別だ（連用形「こよなく」のウ音便で「こよなう」）。／解説：「こよなう年老い」で「この上なく年老いて」の意。

問4 イ（気味が悪い・異様な）。「うたて」は不快・異様の意で、「うたてげなり」は「いやな感じだ・気味が悪い感じだ」。

問5 三人。／解説：「翁ふたり（二人）」と「嫗（一人）」で合わせて三人。

問6 翁ふたり（二人の老人）。「翁ふたり」が「嫗」と行き会った、という関係。

問7 「居（ゐ）」＝ワ行上一段動詞「ゐる（居る）」の連用形（座る・いる）。「ぬ」＝完了の助動詞「ぬ」の終止形。「めり」＝推定（婉曲）の助動詞「めり」の終止形（～ようだ）。全体で「（同じ所に）座ったようだ」。

問8 (1) あはれなり（ナリ活用形容動詞）。(2) しみじみと心ひかれる・趣深い。／解説：連用形「あはれに」で、語り手の感動を表す。

問9 （訳）（二人とも）同じような（年老いた）姿であることよ。／解説：「ものの」は「人の」の意で、よく似た老人の姿に語り手が感じ入っている。「かな」は詠嘆。

問10 イ（詠嘆の終助詞）。「～だなあ・～であることよ」と感動・詠嘆を表す。

問11 直前に登場した二人の老人（翁ふたり）を指す。／解説：「これら」は複数を指す語で、出会った老人たちのこと。彼らが笑い合い、顔を見合わせて話し始める。

問12 （訳）思っていること（言いたいこと）を言わないのは。／解説：「おぼし」は「思ふ」の意の形容詞的な語で、「おぼしきこと」は「言いたいと思うこと」。

問13 （例）言いたい事を言わぬと気がふさぐこと。（十五字以内）／解説：注のとおり、言いたいことを我慢すると腹がふくれる（気がふさぐ）、という有名な一節。

問14 ア（断定の助動詞「なり」の終止形）。「わざ（名詞）＋なり」で「～ことである」と断定する。文末の「や」は詠嘆・念押しの終助詞。

問15 直前に係助詞「こそ」があり、その結び（係り結び）として文末が已然形になっている。／解説：「とこそ言はれけれ」で、「こそ」を受けて過去の助動詞「けり」が已然形「けれ」で結ばれている。

問16 過去の助動詞「き」の已然形「しか」。「～した」という過去を表す。連用形に接続する。／解説：「侍り（連用形）＋しか」で、過去の助動詞「き」が已然形になっている。

問17 順接の確定条件。已然形＋「ば」で「～したので・～したところ」の意。ここでは「参詣したところ（～であった）」と訳す。

問18 イ（紀伝体）。／解説：『大鏡』は、帝の歴史（本紀）と臣下の伝記（列伝）を組み合わせる記す紀伝体の歴史物語。『史記』にならった形式で、二人の老人の対話を通して語られる。

問19 藤原道長（ふじわらのみちなが）。／解説：『大鏡』は道長の栄華を頂点として撰閲家の歴史を描く。

問20 歴史物語。／解説：実在の歴史を物語として叙述したもの。『栄花物語』も同じ歴史物語に分類される。

問21 『今鏡』『水鏡』『増鏡』。／解説：『大鏡』とこの三作を合わせて「四鏡」と呼ぶ。書名にすべて「鏡」がつく。

問22 大宅世継（おおやけのよつぎ）・夏山繁樹（なつやましげき）。／解説：百九十歳ほどの大宅世継と、百八十歳ほどの夏山繁樹という二人の老人が語り手となる。
